

トロント研究留学記

Department of Thoracic Surgery
University of Toronto, University Health Network

古賀 教将

(熊本大学呼吸器外科)

2021年5月、まだCOVID-19のパンデミックによる規制が厳しいなかカナダ・トロントに渡航して早くも2年が経ちました。Work permitの申請も常時よりはるかに煩雑で、さらに入国後も隔離措置やラボの人数制限などで半年くらいは不自由しておりましたが、それも今となってはいい思い出(?)です。渡航前から同じトロントの日本人研究者の先生方には様々なアドバイスや情報を共有をいただき、大変助けていただきました。

トロントは年間の約半分が冬ですが、寒さ対策は十分にとられていて室内は職場も自宅もとても暖かいです。夏は湿度も低くて適度な暑さで、秋の紅葉も非常に美しく、年間を通して快適に過ごすことができます。街もラボも多様な国籍・人種の人々が集まっており、アジア系も多いおかげか人種差別を感じたことはありませんし、カナダは銃も規制されていて、日本人が家族で留学するにはとてもいい環境なのではないかと思います。

トロント大学・トロント総合病院の胸部外科(Latonar Thoracic Laboratories)は9人のPIを擁し、呼吸器外科分野では研究・臨床ともに世界トップクラスの組織です。そのDivision HeadであるDr. Yasufukuのラボに所属しつつ、肺癌病理の権威であるDr. Tsaoラボとのコラボレーションのもと、肺癌の臨床検体を用いてオルガノイドやゼノグラフトを樹立し、それらを使用した肺癌の薬剤感受性や耐性に関する研究を主に行なっております。外科系のラボと基礎系のラボの両方の研究に携わることができ、様々なバックグラウンドを持つ同僚から刺激を受けながら充実した研究生活を送らせていただいております。また年間200例近い肺移植を間近で見る機会も多く、呼吸器外科医としてはこの上ない環境です。

COVIDにより留学開始が延期となり、いつラボからの渡航許可がおりるかわからない状況でなかなか留学助成の申請が難しく、さらに私がこちらにいる間に物価高や円安が進んだこともあり、上原リサーチフェロウシップには経済的にも精神的にも大変助けていただきました。上原記念生命科学財団の関係者の皆様には心から感謝申し上げます。また、留学の機会を与えていただいた熊本大学の鈴木実教授と医局員の先生方、渡航延期後も面倒見ていただいた近畿大学の光富徹哉教授にもこの場を借りてお礼申し上げます。

トロント留学記

Tanz Centre Research for Neurodegenerative diseases
University of Toronto

今 智矢

(弘前大学医学部脳神経内科)

2022年4月からカナダ・トロントのTanz Centre for Research in Neurodegenerative Diseases, University of Torontoに留学しています。以前から憧れていた脳神経内科医・脳神経病理医のDr. Kovacsがトロント大学の教授に招聘され新たにラボを立ち上げることを聞き、直談判して留学が決定しました。

トロントはカナダ最大の都市で、移民を積極的に受け入れています。それにより、多民族・多文化・人種のモザイクが形成され、英語圏でありながら人口の半数の家庭内で話される第一言語が英語以外だそうです。一般的にカナダ人はおおらかな性格で優しいと言われていて、こちらの英語が拙いとわかるとゆっくり話し、また根気強く聞いてくれる人が多いです。駅やショッピングセンターでは次の人のために、ドアを押さえていてくれ、電車やバスでは高齢者、障害者、子供連れにはすぐに席を譲ります。これらは是非見習いたい習慣だと思いました。また、日本同様、銃の所持は厳しく制限されており治安は良く、世界で住みやすい都市の上位にランクインしています。

トロントの5-10月はとても過ごしやすいです。夏は蒸し暑くならず快適で、4、11月は肌寒く、12-3月は寒いです。オフタイムの楽しみは地元トロントブルージェイズのメジャーリーグの試合観戦です。カヤックやアイススケートなどのカナダらしいアクティビティにも挑戦しました。

原稿作成時の2023年はコロナ渦の影響はほとんどありませんが、ロシアのウクライナ侵攻に端を発した極端な円安・インフレの影響を受けていて、お金のやりくりで苦労しています。

研究生活では、物事が日本のようにスケジュールに合わせてキチキチと進まず、何事にも時間がかかるように感じて、少しフラストレーションがたまることがあります。

海外留学はその準備段階から多くの労力を要します。しかし、その苦労を含めて他では得難い貴重な経験ができますし、自分自身を大きく成長させる機会にもなると思います。メリットデメリットはあるかもしれませんが、海外留学を希望する方には是非、挑戦してほしいと思います。最後に、助成金により支援していただいた上原記念生命科学財団に心よりお礼申し上げます。



留学先の研究所が附属する大学病院 Toronto Western Hospital

トロント小児病院 (SickKids) 留学記

Division of Gastroenterology, Hepatology and Nutrition
The Hospital for Sick Children (SickKids)
Department of Pediatrics, University of Toronto

吉年 俊文

(琉球大学大学院医学研究科臨床研究教育管理理学講座)

2022年7月よりトロント小児病院(SickKids)にて小児消化器肝臓クリニカルフェローシップを開始いたしました。このプログラムは、Clinical fellowshipとResearch fellowshipが組み合わされた3年間のプログラムであり、Academic Pediatric Gastroenterologist/Hepatologistを育成することを目的としています。最大の特徴はDiversityであり、同期にはカナダ、インド、サウジアラビア、ドイツ、日本出身の5人がおり、他学年のフェローも合わせると欧州や南米、アフリカなど計10カ国から集まっています。このDiversityの重視は、フェロー同士が各国の疾患背景や治療の違いを共有し、帰国後も関係を継続することで、国際多施設共同研究を容易にする環境を創ります。

私の研究メンターは、北米小児消化器肝臓栄養学会(NASPGHAN)の会長に今年就任したVicky Ng教授と、炎症性腸疾患(IBD)とClinical Epidemiologyを専門とするEric Benchimol教授です。フェローシップの初年度は100%臨床業務に従事しておりますが、幸運にも2つの研究を開始することができました。1つは、北米最大の小児肝移植センターである当院のデータを利用し、Anonymous living donor liver transplants(全くの他人からの肝移植提供)に関するSocial determinants of healthに関する研究や、小児期肝移植後の成人における予後や合併症に関する研究です。もう1つは、IBDのサルコペニアに関する観察研究やメタアナリシスです。国民皆保険のあるカナダのデータはアメリカのデータと違うため非常に興味深く思っています。その他の研究活動としては、北米(米国、カナダ、メキシコ)全ての小児消化器フェロー(1年目)が招待されるNASPGHANの1st year fellow conferenceに参加し、臨床や研究についての討議ができました。また2023年3月にはCDDW(カナダ最大の消化器肝臓学会)でポスター発表をしました。

留学は日本のcomfort zoneを抜け出し、家族にとっても苦勞することも多いのが現実です。今回は2回目の留学でしたので、家族もトロントの環境に早くから慣れることができいております。4歳になったばかりの長男は義務教育が始まり、学校で友人を作ることができ、次男もデイケアを楽しめております。

世界の一流施設で、臨床と今後の研究によりネットワークを広げ、帰国後に日本の研究者や後輩小児科医に貢献できるように精進いたします。

最後に、このような貴重な機会を与えていただいた上原記念生命科学財団の関係者の方々

に心より感謝申し上げます。また、生活を支えてくれている妻、長男、次男に感謝の意をここに表します。



2022年度の World Best Children's Hospitals ranking (Newsweek) で世界1位となったトロント小児病院